

とうきょう すくわくプログラム実践報告書



活動のテーマ:「動物」普段から、保育室にある様々なものを組み合わせて遊ぶことを楽しんでいた子どもたち。10月後半頃～、ブロックと恐竜フィギュアを組み合わせ、電車に乗っているところを表現して遊ぶ



積み木と組み合わせ、囲いの中に恐竜を整列させて並べるといった遊び方も見られるようになった



並べ方も日々変わる中で、恐竜の動物園のように見えたことから、別のコーナーに動物のフィギュアも出してみることにした



毎日のように、誰かしらが動物フィギュアコーナーで遊ぶ姿があり、「ここは動物園なんだ!」とイメージが出てくるようになってきた



テーマの設定理由:動物について調べたり、実際に動物園に行き動物を観察したり触れ合ったりする中で、子どもたちの興味や関心が広がり、さらに動物に関連した遊びが深まることを願い、テーマを設定した



活動スケジュール:11月28日に多摩動物公園へ遠足に行く計画を立てた。活動のための環境設定:動物の図鑑、動物の顔の写真集、絵本などを置き、また動物園のマップを見ながら、楽しみに当日を待った



活動の内容・活動中の子どもたちの姿等:遠足当日、クラスの全員が出席。ライオンが間近で見えるライオンバスに乗車



捕食する様子を、友だちと感じたことを伝え合いながら見入っていた



オランウータンの子どもが、綱渡りで落ちないのか心配する声があがるなど、よく観察している姿があった



キリンの舌の色、長さ、木の上の高いところにあるエサを補食する様子に気付く子どもたち



実際の動物だけでなく、園内の動物紹介の写真等からもさまざまなことを吸収した様子



「フラミンゴの足は後ろに曲がってる」「ゾウのうんちは結構いい匂い」「ゾウの鼻は骨じゃなく筋肉らしい」「サルは顔が赤いね」など、気づいたことを口々に伝え合う子どもたち



帰園してからも余韻はおさまらず、早速「動物園ごっこしたい」と言う子もあり、見て感じたことを遊びの中に取り入れたい欲求を感じた



翌週月曜日、動物遊びコーナーを広げてみると、早速遊び始める。遠足前はただ何となく動物を並べることが多かった姿から、キリンが高いところの葉を捕食する様子を再現するなど遊び方に変化が見られた



ライオンが骨付き肉を食べる様子も色つきの積み木を使って表現。自分たちが乗ったライオンバスも周りを走っている



再現遊びは園庭でも。砂に水をかけて黒くし、その上に白砂を少しずつ点のように置いて、「ホタルの光だよ」と嬉しそうに教えてくれた



動物遊びコーナーを飛び出し、保育室の床を広く使ってダイナミックに動物園を作る姿も見られるようになっていった



動物ごとに積み木等で区切った空間に配置したり、



動物それぞれにエサを置いたりと細かなところまで再現している



「ここは駐車場だよ」と、動物だけに限らず動物園全体の再現も、友だちとイメージを共有しながら楽しむ姿が見られた

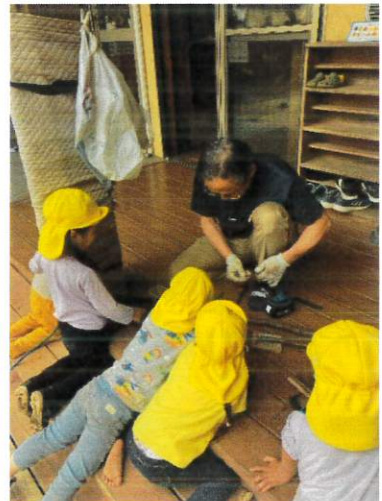
振り返り：動物園に行く前後で、動物フィギュアを使っての遊び方が全く違うことが感じられた。リアルに再現することが楽しく、どんどん広がっていった動物園ごっこ。また、実際には見えていない動物へも興味や関心が向き、ホワイトタイガーのフィギュアを見て「しまうまみたいだけど何か違う」と疑問を感じ調べようとする姿もあった。まだまだ広がりそうな「動物」の遊び。これからも保育者も一緒に楽しんでいきたい。

テーマ 3歳児クラス【夏野菜】

・自園はここ数年、近隣の梅林で梅を収穫させていただいている。
今年も3歳児クラスで5月に梅を収穫。その梅を使って梅シロップづくりをした時に、大人が思っていた以上に期待を膨らませて過ごしていた子どもたちの姿があったので、引き続き夏野菜の収穫や、調理する経験ができたらいいなと感じた。
せっかくなら夏野菜は近隣の畑で収穫するのではなく、子どもたちが日常的に目で見ると触れることができる環境(園庭)で育てみたい。野菜を収穫するまでの過程で、どのような子どもたちの様子が見られるかを観察したいという大人の思いから、子どもたちに「野菜をそだててみない？」と話してみることからスタートした。

●6月 何を育てよう、何が食べたい??から看板づくりへ

どんな夏野菜があるか、何の野菜を食べたいか、子どもたちと話しながらか決めていった。自園は畑がないのでプランターに土を入れて苗を植える所から始めると、積極的に参加をする子どもたち。すると「みんなが何が植えてあるか分かるように看板を作ったら？」と提案する子がいた。野菜の絵を描いたり、大人が描いた絵に色づけしていると、用務さんが「何作ってるんだ？」と気にかけてくれて看板づくりを手伝ってくれた。用務さんの使う工具に興味津々の子どもたちであった。それぞれが思いついたことや感じたことを言葉にし、人と人とのかかわりの中で野菜づくりが始まった。



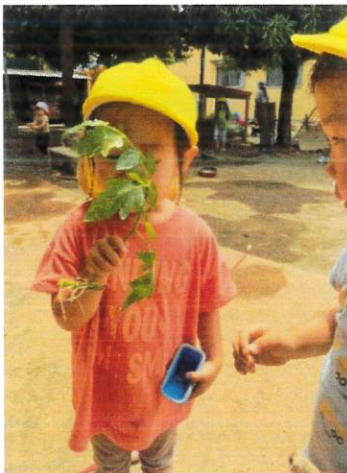
●7月 大きくなっていく中での発見

園庭に出ると、積極的に水をあげに行く姿、園庭で遊びながら、ふと思い出したかのように見に行ったり、通りかかった時に苗の様子を見ていたりしている姿がある。大人が野菜の成長を気付かないフリをしていると「水あげるね」「みて！小さいナスが出てくるよ」と教えてくれる。猛暑が続くと、葉は大きくなり花は咲くが実がつかない。実がついても途中落ちてしまい、中々収穫できない日が続いた。すると、虫好きな子が「なんか虫がついてるよ、虫の仕業じゃない？虫が食べてるんじゃない？」「これはウリ虫っていう虫だよ。」花付近に、虫が飛んでいること、葉の裏に虫の卵がついている事を発見して得意気に教えに来てくれる。そこには野菜の成長よりも、虫を見つけて嬉しそうに捕まえ、虫の発見を喜んでいる子どもたちの姿があった。



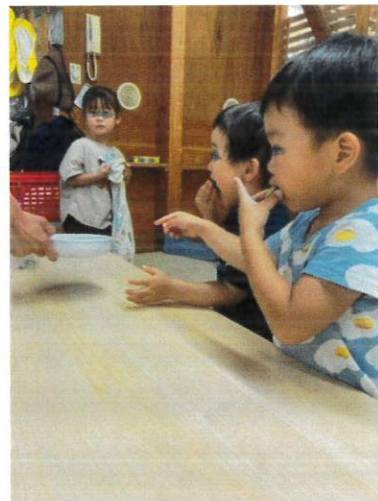
●8月 遊びへとつながっていく

プランターの置いてある場所は園庭の送迎時の通り道でもあり、0から5歳児まで同じ園庭で過ごしている。人通りが多い分、触って実を摘んだり、折れてしまうことも度々あった。その度に子どもたちは、折れた枝や葉の匂いを嗅ぎ「トマトのにおいがする！」「なんか、チクチクしてて、ザラザラしてるよ！？」と触っていたり、色水遊びで使っていたすり鉢で葉を潰して色水や野菜ジュースをつくったりと、実が大きくならなくても、遊びに使っている姿があった。大きくならず思うように育たないことを心配しているのは大人だけで、子どもたちは誰一人もマイナスには捉えていない。休み明けに大きくなりすぎて捨てられがちな野菜も、野菜でスタンプ遊びをしたりと子どもたちはいつも嬉しそうに遊びとして取り入れている姿があった。



●9月 収穫する、調理する、食べる

その中でも、食べられる大きさにいくつか育つ。大きくなっている野菜を見て「もう食べられるんじゃない？」と伝えてくる子が増えてきた。自分ではさみで切って収穫した時の嬉しそうな表情。言葉にならない思いが喜びを物語るように、表情で伝わってきた。包丁で野菜を切ることを初めは怖がってやらなかった子も、収穫する度に繰り返し調理をしていると、友だちの包丁を使っている様子を見ているうちに、次第に気持ちが変わってくる。3回目の調理の時に「やってみる」と言って包丁を手にするようになったのだ。切り終わると「前はやらなかったのに、今日はやったね！」と誇らしげに伝えてくる姿があった。又ナスが苦手で昼食に出ると残していた子も、自分たちで調理したナスはおいしいと言って食べている様子が見られたり、お家に帰ると「保育園でつくったナス、おいしかったからお家でも食べたい。」「油とお醤油で焼いて食べるとおいしいからお家でもやって。」と伝えていたり、保育園で作ったように家庭で調理をすると、ナスをパクパク食べていて驚いたという、家庭からのエピソードも聞くことができた。



●10月 収穫後の発見

収穫して野菜を味わって葉も枯れてきた頃、土に還すため苗を根っこから抜くと、土の中から幼虫が出てきた。子どもたちは興味津々でプランターをひっくり返して幼虫を探し始めた。「何匹いるかな？」と集めた幼虫を地面に置いて数えてみたり、「大きくなったら何になるか見たいから飼う！」と言って、飼育していたカブト虫の飼育ケースに入れている姿があった。昼寝明け飼育ケースを開けてみると、土に潜らずに黒く変色して動かなくなった幼虫を目にした子どもたち。“死”について理解するにはまだ難しい年齢だと思うが、このような体験を繰り返していきながら“いのち”があることに気づき、いのちをイメージできるようになっていくのであろう。



●まとめ

園庭で夏野菜を育て、収穫するという大人が意図した活動であったが、育てていく中で、形状や匂い、手触りや変化など、様々な発見をして面白がる子どもたちの姿があった。その姿から、余白の時間に生まれた子どもたちの発見こそが、好奇心や探究心へとつながり、身近な事象への関心が高まってくるのだと感じた。

又、収穫や調理というその日限りの体験ではなく、日常的に見て触れることができる園庭で、自分たちで育て、収穫、調理していくことで、自然物の多様で複雑であり常に変化していく様子を一人ひとりのタイミングで感じることもできたのだと思う。

収穫する、調理して食べるという体験よりも、その過程が大事な体験であったことに気付かされる。

今後も、心動かされる体験を子どもたちが日常的にできるような園庭環境にしていけるように考えていきたい。

1、活動のテーマ

<テーマ> 運動

<テーマの設定理由>

遊びを通して、自分の身体を動かす楽しさや、出来るようになったことを実感し、達成感を通して自信に繋がっている子どもたちの姿があった。友だちが楽しそうにしている様子に気づき、興味を持って自分でも挑戦してみようとしたり、出来たことでもっとできるようになりたいと意欲的に次への挑戦に繋がっている姿があった。

自由遊び時に棒のぼりをしていた。早く上る、一番上まで上る、棒から綱に移ってみるなど、個々で遊んでいたりと、友だち同士で一緒に上る競争をしてみるなど遊び方を工夫しながら楽しんでいる姿があった。

そこから、周囲の子が棒のぼりを楽しんでいる友だちの様子に気づき、やってみようとする子が増えていった。友だちの姿から、身体を動かす事への楽しさ、興味のきっかけに繋がっていた。



上りたい場所で
何度も上る



上れるようになって
嬉しい！
支柱にも上ってみる

2、活動スケジュール

自由遊びの中で、こども達が挑戦心を持ってできる運動遊びを取り入れながら、達成感を感じられる運動遊びを取り入れていった。

十一月の運動会では、日々の積み重ねから子どもたちが挑戦したいと自信を持ってできる内容にしたいと考えていた。

そのため、棒のぼりから少しずつ達成感を積み重ねていけるようにしていった。

3, 活動のために、準備した素材や道具、環境の設定

棒のぼりは園庭にあるもの。

ぽっくり、竹馬、体技台、鉄棒など。

4, 探究活動の実践

<活動の内容>

遊びの姿から、挑戦しているものを積極的に取り入れていった。

ぽっくりから竹馬につなげたりなど。

<活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

達成感を得て、さらに次のことへ挑戦しようとする子が増えていった。また、自然と子ども同士で教え合ったり、出来る子に「教えて！」と声を掛ける様子もあった。できない事に悔しさを感じながらも、あきらめず挑戦し続けることで得た自信が、子どもたちの中で揺るがない自信へと繋がっていった。

できないことも「もう一回」「ちょっと今は難しいかも…」と自分で決めながら様々な運動あそびを経験していった。

竹馬ができる子に
あこがれて練習を
始める



友だちが楽しそう…

ずっとやっている姿に自分もやってみよう



棒のぼりから
竹のぼりに挑戦へ

5, 振り返り

<振り返りによって得た気づき>

日々の遊びの中に、こども達の挑戦したい事が散らばっており、子ども自身が一つ一つ達成感を得ることで更に新たな挑戦に繋がっている。

達成感を得るだけではなく、個々で得ていく喜びから、他者と共有し合う喜びに変化し、友だちの影響も受けながら新たな挑戦を見つけていることが子どもの姿から改めて感じられた。

運動遊びでは、意識的に環境を整えていくこともあるが、今ある環境の中で子どもたちなりに様々な挑戦を積み重ねながら過ごしている。その姿をひとつひとつ受け止めていくことで、子どもたちの自信に繋がり、身体的な成長だけではなく、心身の成長にも繋がっていく。だからこそ、今ある子どもの姿から、環境を整えていくことが大切であるとわかった。

2025年度 つばさ保育園
とうきょうすくわくプログラム活動報告書
テーマ 『表現』 ～0・1・2歳児～

〈テーマの設定した理由〉

日ごろから、手先を使い、じっくりあそぶことを楽しむ姿あり。
形・重さ・積む・模倣・見立て・重ねる・くっつけるなど、
子どもたちの無限の表現を更に深め広げる。友だちや大人と共有する
ことが楽しくなっている子や同時に表現するおもしろさが広がってきた。

〈活動スケジュール〉

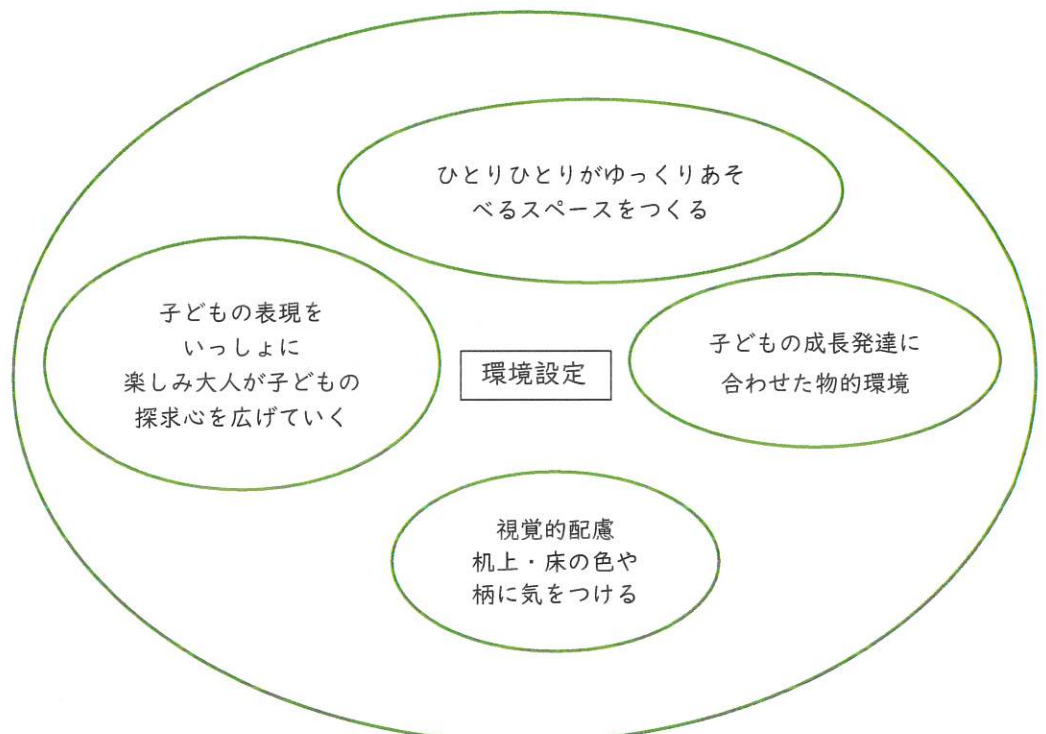
- ◆0歳児の子どもたちが保育園で積み木に触れる。
- ◆1歳児・2歳児の子どもたちが積み木で「並べる」「積み重ねる」「できた」「できなかった」「どうすればいいの」「これなんだろう」とそれぞれの思いを持ちあそびが広がっていく。
- ◆形や重さ手にとったときの感触、にぎる・持つなど異なる様々な物を用意する

〈職員の思いを出し合い… 共有したこと〉

- 全身を動かす中で、手先の器用さもついてくることを会議で共有
- 自分が経験したことを積み木だと表現できることを共有
- 積み木等は、子どもが興味や探求心をもっていることを自己表現するアイテムの一つ。
作り変える魅力もある。

〈環境のデザイン・活動のために準備した素材や道具、環境の設定等〉

- ・積み木
- ・カラー積み木
- ・木の人形
- ・板積み木
- ・かご
- ・コルク積み木
- ・ホワイトボード
- ・動物磁石



〈探求活動の実績〉 つばさ保育園の0歳児から2歳児までの手先をつかってあそぶ

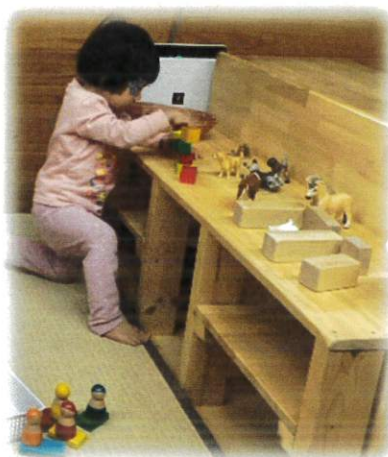
(0歳児 事例1) 積み木を片手に口に運んでいた子どもたち。積み木を両手で持ちカチカチと音を出して楽しむ姿が見られた。そのカチカチの音を聞き、お友だちが近づいてきて、いっしょに笑い合い、真似をする姿も見られた。



自分の手で積み木を持って動かす。動作が楽しい時期にもなり、積み木をつかむ、はなす、つお姿も見られた。



(1歳児 事例1) 保育者と2歳児の遊んでいる様子を見ていた。翌日、その遊びを思い出し自分でもあそび出す。その後、コルク積み木、カラー積み木、木の人形、動物のフィギュアを出すと、車やお家、食べ物を見立て、人形を動かしながら、言葉を発し一人あそびを楽しむ姿が見られた。



ふたつのものを自分で並べたり、重ねたり考えてあそぶ姿が見られた。子どもの様子でアイテムを増やすと自分の体験や物を通してあそぶことで言葉の表現も豊かになった。



(1歳児 事例2)(動物マグネット) 1歳児で目と手の協応動作が発達してきているが、まだ操作するのがまだ難しいこともある。傾斜をつけたホワイトボードにマグネットをつける。遊びを用意して。マグネットを持ち微妙なバランスで手首を返ししながら、貼り付けることを体験する。



物を見て、それを構成していく遊びにはならないが、子どもの思いとしては「(一つ一つが) くるま」「でんしゃ」と表現しながらあそんでいた。「自分でできた!」の経験を大切にしている。



(2歳児)



お家に見立てたり、猫をおいてみたり…。自分のイメージを膨らませている姿も…。



隙間ができないように同じ形を選んでくっつける

(2歳児 事例1) 積み木はケースから出すことを楽しんでいたが、少しずつ同じ向きに並べてみたり、積み重ねてみたり、それぞれのやり方になっていく。友だちが遊んでいると、いっしょに隣で遊び始める姿も見られた。



組み立てる

どうやったら
高く組み立てられる
か…。
探求心が芽生えて
くる。
次は
たおれないように…



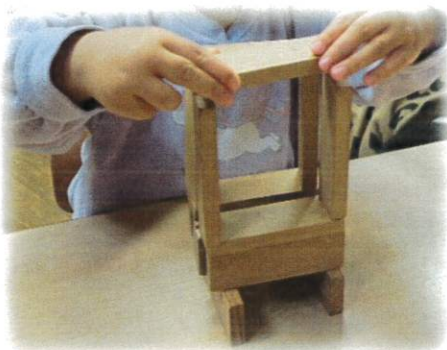
並べる

自分の思うよ
うに並べて
みる。



友だちと…

友だちといっしょに
同じことをする楽し
さに気づく。



形にする

机上あそびで
自分の頭の名の
イメージを形に
する。



探求心

友だちといっしょに、
それぞれの思いを表現
し合って、どう作って
いくか探求しながら
あそぶ姿も…。

（2歳児 事例2）4月入園の2歳児女子は、初めて板積み木を出した日はどうやって遊んでいいかわからなかったが、翌日の朝「今日も積み木やろうよ」と保育者に声をかけてきた。前日に保育者と組んで積み重ねていた楽しさを覚えていて、思い出しながら自分で組み重ね始めた。その遊びをきっかけに、木の人形とカラー積み木を用意してみると、コルク積み木とカラー積み木を組み合わせて、お人形が入るお家と車、食べ物、に見立て子どもたちで会話をしながら遊ぶ姿が見られた。



〈振り返り・共有〉

- ・積み木を床でやることと、机上で行うためのテーブルや子どもが操作しやすい積み木や人形等があれば、より子どもたちが主体的に遊べる空間ができるのではないかと思います。
- ・ひとりひとりがゆっくりあそべるスペースを確保するのが課題。
- ・保育者の積み木や手先のあそび方を学ぶ機会を作り、より子どもといっしょに楽しめるようにしたい。
- ・子どもの探求心がいつでもできる環境を心がけていきたい。

〈テーマの設定した理由〉

春を過ぎ夏が近づくと暑さが増し、園庭であそぶ中、外の水道に興味を持った。水道の横にはシャワーが設置してあり水が出ることもあそびの中で発見した。保育者が「お水でたね」と共感すると笑顔で水の感触を試しはじめた。水が手にあたること、シャワーを頭からかぶる面白さも発見した。そこから…

〈活動スケジュール〉

子どもの姿をみて職員の思い…

- 水の感触や
- 水の透明度を視覚からも楽しんでほしいという
- 職員みんなの思いが生まれる



自園の悩み…

自園の園庭は、雨が降ると水たまりができやすく、地面にバケツやタライを置いてあそんでも砂や泥が水にすぐ混ざってしまうことに頭を抱えている。その水の透明度を保つためには？と職員で話し合いを重ねる。

職員の思いを出し合い… 共有したこと

クリアな入れ物を用意し透明をそのまま保てないか。シャワーに代わるものは噴水にしてみたら？外で十分に水遊びをするには暑さの対策も必要。木陰は涼しさを実感。木陰と日陰作りを意識。より涼しい環境を目指しミストを導入。熱中症指数計は忘れずに設置。

〈環境のデザイン・活動のために準備した素材や道具、環境の設定等〉

- ・クリアな容器やケース（市販のもの）
- ・1歳児に合った高さのテーブルやベンチ
- ・四角いテーブル桶三段（DIYしたもの）
- ・噴水マット（市販のもの）
- ・ホースに穴をあけたもの
- ・霧吹き
- ・ペットボトル
- ・ジャグ（市販のもの）



～番外編 四角いテーブル桶～
かまきりのおうち

（1歳児かぜ組より）初めてのグッツたち7月

（四角いテーブル桶（三段））

他クラスがいなくなったところで四角いテーブル桶に行ってみるIちゃん。始めは水をカップで受けとめることが主だったが途中から手に当たる水の気持ちよさを感じていた。カップを手放し、手のひらでじっくり…。水道とはまた違う感覚…。一本指を突っ込んでみたりする姿が見られた。



8月桶には水門がありフタを上げると貯めていた水が流れる。水の流れを目で追う姿が頻繁に見られた。



〈探求活動の実績〉



夏の定番
ジャグ

すくって
入れて…



手を入れる



〈振り返り・共有〉

- ・霧吹きあそびは繰り返しかかると水の跡や出てくる時のシュツという感覚などいろいろな気づきがあったように感じた。
- ・四角いテーブル桶（三段）を落ちてくる水の流れは、水道とはまた違ったゆるやかなやさしさの圧（湧き水のような）であり、その手触りが心地よさそうだった。
- ・左手のカップに水を入れ、左手のカップから右手のカップに水を移し替えることがブームになり、左手にカップを持って右手だと注げるのにそのまま左手で注ごうとすると“あれ…？”と戸惑い持ち換えて、右手で注ぐことができる発見をしていた。
- ・あそんでいる時は、夢中でもあそびが切れるとふと服がびしょびしょで気持ち悪いことに気づくことが度々あった。
- ・ジャグや水道からでる水を口の小さい容器に入れるために沢山こぼしながらも、位置や高さを調整することが日に日に上達していた。
- ・園庭で泥水を触る機会は多くあるが、やはり透明な水を触ることを体験するためにはと考え、いろいろな透明の容器を用意したことは、透明度が活かされ良かった。
- ・噴水は複数の子が同時に足元からの水の冷たさを感じられることができた。また上がってくる水のしぶきを目で追っていた。
- ・環境省が出している熱中症予測を元に朝礼で確認し園庭では熱中症指数計を設置した。更に子どもの近くで過ごすクラス担当が熱中症指数計を持っていた。木陰と日影を作ることも心がけミストも使用した。午前中は涼を感じ園庭での水遊びが楽しめる日が多く持てた。